和歌の修辞 確認テスト（枕詞・掛詞・縁語ほか）

組　　番　氏名 _____　／　100点

本文

① あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む（柿本人麻呂『拾遺集』）
② ちはやぶる神代も聞かず竜田川からくれなゐに水くくるとは（在原業平『古今集』）
③ 花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに（小野小町『古今集』）
④ あをによし奈良の都は咲く花のにほふがごとく今盛りなり（小野老『万葉集』）
⑤ 立ち別れいなばの山の峰に生ふるまつとし聞かば今帰り来む（在原行平『古今集』）
⑥ 君がため春の野に出でて若菜つむわが衣手に雪は降りつつ（光孝天皇『古今集』）
⑦ 風をいたみ岩うつ波のおのれのみくだけてものを思ふころかな（源重之『詞花集』）
⑧ ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ（紀友則『古今集』）
⑨ 大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立（小式部内侍『金葉集』）
⑩ 瀬をはやみ岩にせかるる滝川のわれても末にあはむとぞ思ふ（崇徳院『詞花集』）

設問（全24問）

1. ①の歌の初句「あしびきの」は、何という語を導く枕詞か答えよ。

2. ①の歌で「山鳥の尾のしだり尾の」は、ある語句を導く前置きの表現である。この技法の名称を答えよ。

3. ①の歌で、上の前置きの表現が導いている語句を、歌の中から抜き出せ。

4. ②の歌の初句「ちはやぶる」は、何という語を導く枕詞か答えよ。

5. ②の歌で「竜田川」「水」「くくる（潜る）」のように、関連の深い語が用いられている。この修辞技法の名称を答えよ。

6. ②の歌の現代語訳を記せ。

7. ③の歌で「ながめ」に掛けられている二つの意味を答えよ。

8. ③の歌で「ふる」に掛けられている二つの意味を答えよ。

9. ③の歌に詠まれた作者の心情を、簡潔に説明せよ。

10. ④の歌の初句「あをによし」は、何という語を導く枕詞か答えよ。

11. ⑤の歌で「いなば」に掛けられている二つの意味を答えよ。

12. ⑤の歌で「まつ」に掛けられている二つの意味を答えよ。

13. ⑥の歌に用いられている主たる修辞技法（句末の表現上の特徴）を一つ挙げよ。

14. ⑥の歌の「わが衣手に雪は降りつつ」から読み取れる、若菜を摘む人物の様子を説明せよ。

15. ⑦の歌で「風をいたみ岩うつ波の」は、ある語を導く序詞である。導かれている語を歌の中から抜き出せ。

16. ⑦の歌の「くだけて」は二つの意味で用いられている。波と心、それぞれの意味を説明せよ。

17. ⑧の歌の初句「ひさかたの」は、何という語を導く枕詞か答えよ。

18. ⑧の歌の主題を、季節感に触れながら簡潔に述べよ。

19. ⑨の歌で「いく野」に掛けられている二つの意味を答えよ。

20. ⑨の歌で「ふみ」に掛けられている二つの意味を答えよ。

21. ⑩の歌で「瀬をはやみ岩にせかるる滝川の」は、ある内容を導く序詞である。何を導いているか、歌の趣旨に即して説明せよ。

22. ⑩の歌の「われて」に重ねられている二つの意味を答えよ。

23. 本文の和歌①〜⑩のうち、文末を名詞で結ぶ「体言止め」が用いられている歌を一つ選び、番号で答えよ。

24. 「枕詞」と「序詞」は、いずれもある語を導く働きを持つ。両者の違いを、音数と独創性の観点から記述せよ。

© 誰でも古典塾　kotennosennsei.com　／　本文は古典原文（著作権の対象外）